ものがたり

理兵衛堤防

森岡忠一

目次

ものがたり　理兵衛堤防……森岡　忠一　3
片桐小学校所蔵『理兵衛堤防』と郷土の見直し……上条　宏之　49
座談会『ものがたり理兵衛堤防』の書かれた頃……53
編集後記……58

本文カット　いさわやすと

ものがたり　理兵衛堤防

森岡忠一

「ドン。」

不意に下の方で、雀でもおどすらしい火薬の破裂した音をきいて、私は足をとめました。雀おどしの鉄砲とはちがい、もっと大きな音でした。

かたわらには美しく紅葉した山桜の木がありました。少し疲れてもきたので、私はその根元に腰をおろして、しばらく休むことにしました。秋の日がもう少しで沈むころでした。

私の足をとめた所からは、くぼい田島の里が下の方に、さえぎるものもなく一面に見渡すことができました。広くはないがゆったりとした眺めです。田島一面の稲田は、今しも夕日をうけて目もまぶしいほどに金の色に輝いています。二、三か所　刈り取ってはざにしたのも見えますが、この田、あの田がもういっ

刈りだしてもよい頃でした。

北の方、釜淵峡のあたりから姿を見せて、ずっと南の上片桐村（現在は松川町上片桐）の一段高い段丘が東にのびて、その行く手をさえぎるかとみえる渡場の付近で、ぽっつりと見えなくなるまでに、いくたびか大きく曲がった天竜の川原が、すり鉢の底のような低い田島の里にゆったりと横たわっています。水が少ないせいか、動くとも見えぬ水の面が、キラリキラリとするどく太陽の光をてりかえしています。が、少し南の、東に面した段丘の足もとをそろそろとはって渡場の山峡に見えなくなるあたりは、もうぼっとして日がかぎっています。一段低い田島の里は山のひかげののびるのが早く、夕日のかげの沈むが早い。

川の東、葛島 部落の田島の方に向いた竹やぶの広い斜面が明るくあたたかい緑色にかがやく頃は、田島はすでに暮れています。西の段丘のかげが長くのびて、黄金色の稲田が暮れ、天竜の流れが濃いるり色に沈んでいます。

竹藪を照らした日のかげがその上にある白壁を照らし、東の高い山々の紅葉の

尾根を上へ上へと移っていきます。二流れ三流れ黄金色の雲が、青く澄んだ大空をふぁりとかるく東へ流れていきます。はるかの南、残光をわずかに赤く染めた山なみが遠くもやのうちにとけこんで、日はまったく暮れてしまいました。

移りゆく光と色の美しさにじっと見とれていた私は、ふたたび田島の里へ目をうつしました。中川橋を葛島の方へ荷馬車が二台通っていきます。そこから「ゴトッ、ゴトッ」と、重くおしつけるような音が響いてきます。中川橋のたもとから川沿いに南へのびた黒っぽい杉並木が、よどんで動かぬ水の面に冷たいかげを落しています。ポツリ、かいばでも背負って来るらしい人影が田の道を家のある方へ動いて来ます。

日は暮れたが、まだほの明るい田島の里は、家々からのぼる夕げの煙が、水色の夕もやにとけて、静かにたゆたっています。その平和な夕もやの中から、村社の森に集まったらしい子供達の声と、誰やらが前沢川の板橋を渡る軽い下駄の音とが遠く鳴る汐の音であるかのように聞こえてきます。私は夢心地でじっとそれ

に耳を傾けていました。

「カサリ」

紅葉した葉のひとひらが、かすかな音をたてて、近くの草むらに落ちました。もう登るのをやめて、暗くなりかけた足もとを注意しながら山を下りました。

私は秋のある日の記憶をここに思い出してみました。私はこの片桐村（現在は上伊那郡中川村片桐）へ来てすでに何年か、田島の里の美しさに慣れ親しんでまいりました。春も夏も秋も冬も、田島の自然は美しい姿で、やさしい声で私に呼びかけてくれます。田島の自然は私の心をなぐさめてくれ、また私の心を喜ばしてくれます。私にとってなつかしいものは田島の自然であり、また何時この地と別れても忘れることのできないものは、田島の美しく優しい自然であろうと思います。

ことにも、私はこうして高いところに登り、そこから目の下にうるわしい水絵かとひろがる田島の里を見下ろすことのできることが、また田島がこのような

位置にあることが、いっそう私を楽しませてくれるのだと思うのです。

私は時折こうして高いところへ登ってきては、そこから田島の里を見下ろし、透明な空気の底からかすかに湧いてくる、あの汐の遠鳴りにも似た、夢のようなどよめきを聞くことを楽しみます。そのどよめきに聞きとれている時、私の心はいつか遠く広い無限の境をさまよっています。

数十里も遠く離れている兄弟やお友達のこと。もうお年をたくさん拾われた昔の先生のこと。だんだん亡くなっていった近所の人のこと。忘れそうになるお母さんの暖かい膝のこと。旅のこと。本で読んだ話。遠い外国のこと。はるかな昔のこと。私は広い広い世界のはてに連れていかれ、遠い遠い昔の世の中へ連れていかれます。私はこれを楽しいことに思うのです。

私はこうして今の田島の里を美しいと思うと共に、昔の田島はどんなであったろうと思わずにはいられません。今の田島がこの上もなくなつかしく思われると同時に、私は昔の田島の里がどんなであったろうかとなつかしまれてきます。

少しく注意をしたならば、路傍（みちばた）の一木一石にも長い歴史がありましょう。今、私が見ている、そして暮している田島の里にも、長い長い歴史があります。私は今田島の歴史を二七〇年近くも昔にさかのぼって、松村理兵衛忠欣の話を書いてみたいと思います。

松村理兵衛忠欣の生れたのは、今から二六八年前、徳川八代将軍吉宗の時でした。その頃年号を享保といい、理兵衛は享保六年（一七二一）三月一五日、この片桐村（その頃は前沢村といいました）の前沢重忠の次男に生れました。

一三才の時、この村の名主であった松村忠範の養子となり、理兵衛忠欣と名のって松村家を嗣ぐことになりました。幼名を竹五郎といいました。

そのころ前沢村といったのは今の片桐村よりは小さく、田島よりは広いところであって、戸数が九〇戸、人口が五〇〇人からありました。そしてほとんど全部の人がお百姓をしておりました。田畑をたがやして生計（くらし）をたてており

ました。そのころ、今のような学校はありませんでした。郵便局もありませんでした。中川橋さえなかった頃で、川向うのお隣村へ行くには、みな渡し舟を使っていたのでした。小間物屋も理髪屋（とこや）もそのころはなかったでしょう。今とはよほど様子がちがっていたことと思います。

ここに住んでいた人々は、農業がもっとも大切な仕事でありましたから、長雨が続いたり、大水が出たりして、大切な田や畑を流されるとか、天候が悪くて雨ばかり降ったり、日でりが長く続いたりして穀物が実らないと、人々は食べるものがなく、大変困らなければなりませんでした。いまでも穀物が実らないと大変なことになりますが、交通の不便なそのころは、すぐおいそれと外から食べ物の来よう筈もなく、私たちがここで考える以上に苦しい思いをしなければなりませんでした。

ことにこの田島は、西から流れる前沢川と天竜川との合流する所にありますので、水の便こそよけれ、ひとたび神が怒りをなして川が氾濫しますと、その受け

なければならぬ災難は非常なものでありました。

天竜川も今のように水が少なくはありませんでした。そのころは水も深く、流れも強く、いたるところに底も知れぬ淵をまき、山を割って南へ数十里（一里は約四キロメートル）、荒いしぶきを飛ばして流れ下るさまはまことに天下の大河として聞こえたのでありました。

川の流れがかくのごとく激しく、防水工事のあまり施されていなかったその当時は、この天竜の氾濫の暴威は実に恐るべきものでありました。

長雨が続くと、支流支流の水を全部集めてくる流れは、日一日と増水していきます。砂洲をかくし、岸の柳も、芝生もなびき伏せて流れていきます。山を崩し、谷を割って、黄褐色に変じた濁水が日に日に増していきます。泥のような濁水が目もくるめくばかりの渦紋を巻き、ひた押しにしかも目にもとまらぬ早さで流れ去っていきます。大きくうねってグッと流れ去る水に思わずつれこまれ、よたよたっと体がふためきハッと思う瞬間に、煙かと思うはげしいしぶきをさっとはね

あげて、もう遠くへ矢のように流れ去っていきます。ふれようが、ふれまいが、行く手にある程のものは、ことごとくに引っさらっていかずば止まぬ勢い。思ってもみて下さい。あのはげしい濁水の底を、どのような勢いで、どのような大石がころげていくのでしょうか。地獄の底からでも聞こえてくるかと思われる不気味な音の連続を。あのはげしい渦巻にまかれたらどうか。考えてもぞっとします。

漲ぎり漲ぎった水は、ついに岸にあふれ堤防を切ります。いったん堤を切ると、そこが田であれ、畑であれ、まるで狂った馬がかけまわるように、獲物をみつけた大蛇のように、所かまわず、道をえらばず、滔々として一瞬の後にはたちまちにして大河と化し去っていきます。時によれば家屋もさらう。人命もうばう。りっぱな家も財産もこの大洪水の前には風の前のともしびにすぎず、家畜はもとより、人間の生命が木の葉同然であり、虫けらの命と異なるところがありません。

皆さんは大正一二年の前沢川の大氾濫を知っているでしょうか。水のひいたあ

との、あの目もあてられぬ、無惨な荒れはてた光景をごらんなさい。田や畑も見渡す限り茫漠として砂に埋もれ、大木や大石がところせまいほど、きたならしくころがっています。雑草ははびこるがまま。どうやって生活したらよいでしょう。どこに昨日までの美しい実りの姿を見ることができましょう。まして、田畑を荒らし、家を失った人々の、これからうける苦しみや悲しみはどんなでしょう。

さて、江戸時代の正徳年間にこのような大洪水がありました。くわしくは正徳五年（一七一五）の六月一八日、まだ理兵衛忠欣が生れる六年前のことでした。このとき理兵衛忠欣の養父になる松村忠範がこの土地の名主をしていました。

この正徳五年の大洪水は、伊那郡中いまだかつてなかった大災害だといわれました。続く霖雨（ながあめ）に天竜川は増水し、上流の支流支流は、山を崩し谷を削り、濁水は滔々として中流より下流にわたって未曽有（歴史上、今までに一度も

起こったことがないこと）の大はんらんをしました。

折しも梅雨の頃で、来る日も来る日も、晴れた日とてはありませんでした。雨に明けて、雨に暮れ、深く戸をとざしたような暗っぽいじめじめした日がいく日もいく日も続きました。

南から北へ毎日のようにあわただしく行きかう厚い雲の動きに、人々の不安な眼がそそがれていました。赤石山も駒ケ根も、ずっと厚い雲の中にかくれて、もう何日も姿さえ見せません。ただ暗く、びたびたと降りそそぐ雨をとおして、だんだんに増水してくるらしい天竜の、吠えるようなはげしい音がたえず聞こえてきました。いまにも堤が切れはしまいかとの不安とおそれとに、人々はじっと座っていることさえもできませんでした。家にいる母子は、水を見に、みのを着て今出ていった人の後ろを心配げに見送っていました。

時折、重なり重なった黒雲が、薄紙でもはぐようにうすれてくると、蒸し暑い梅雨時の太陽が、あんなところにと思うあたりへ顔を出しました。あちこちの森

や林で忘れられていた蝉があいついで、うっとうしく鳴きたてました。人々が「もう上がるだろうか」と、ほっと安心の胸をなでおろす間も短く、「ジーン」と蝉の声が、まるで火でも消えるように鳴りを静めると、もう太陽は黒雲におおわれ、サッと板屋根にはげしく雨がそそぎかけてくるのでした。そのまま雨はやまず、雨のうちに日が暮れ、人々の心を不安とおそれとに重く押しつけて、二度と明けないかと思われるような夜へと続くのでした。

雨が降りだしてもう一月あまり、増水に増水をかさねた天竜川は、六月の一八日には人々が必死に水防活動をした甲斐もなく、ついに堤を切って大氾濫をしました。

これが正徳五年の大洪水で、天竜沿岸いたるところ、その災禍をこうむりました。わけても、中流から下流にかけて一層えらくありました（大変だったという片桐地方の方言）。天竜もずっと下流にあたる島田（今は飯田市松尾）のあたりは流失家屋六四、死亡者三三人と書き残され、その流された田や畑は土地にして

広く、お金に見つもっても莫大なものでありました。

この田島の里も、家こそ流されはしませんでしたが、見渡すかぎりの田圃や畑が一朝にして荒涼たる砂地原と変わってしまいました。これが汽車も電車もない交通不便な昔のことです。こうした世の中で、洪水の後にくるものは何であったのでしょうか。それは餓えです。五月六月の大切な成育の時期に長雨をうけて、穀物はほとんど実りません。田や畑は荒涼として見る影もなく荒らされました。収穫の秋は来たが収穫するものとてもありません。どんなに淋しい秋であったことでしょうか。秋が去れば寒い冬が来ます。人々は長い冬を越さなければなりません。人々はどんなに心細い思いをしたでしょうか。

人々はおたがいに倹約を守るとともに、山に行き、草を分けて、米や麦にかわる食物を求めました。ワラビやゼンマイやクズの根をほり、キクナをつみ、トコロ（山芋）を掘りました。ダイコンやイモがご飯の中に入れられました。時には三度の食事も二度しか食べられないようなこともありました。もっともっと、食

べ物のないときには二日でも三日でも、ひもじい思いをしなければなりませんでした。着物がほころびても、これをつくろうこともできませんでした。家は軒がかたむき、柱が朽ちても、これを修理することもできませんでした。食べるに食なく、着るに衣なくしては、病人も出ます。死人も出ます。人々は働く気力もなくなるほどでした。冬が来て、寒さがつのればつのるほど、人々は餓え、その苦しみはいよいよ増していきました。

理兵衛忠欣の養父忠範は、情けあり、また義に強い立派な名主でありました。いま、食べようにも食なく、着ようにも着るものもなく荒れはてた家に餓えと寒さにせまられて泣き、貧窮の底に生きる力もなく、もがき苦しむ人々を見ては、どうしてこれを路傍（みちばた）の石としてそのまま通り過ぎることができましょう。忠範はこれを見るに忍びませんでした。

「気の毒な人たちだ。自分はこの人たちを救ってやらねばならぬ。」

忠範は名主であり、生活も豊かな自分の身にひきくらべて、このように苦しむ人々を救おうと決心いたしました。忠範は苦しむ人々を救うために、自分の財産を投げ出しました。

難破した人々が、大海の中で思わぬ救いの船に出会ったように、奥深い方向もわからない山中で道にまよった人々が道がわかったように、いま、忠範の救助をえた人々はどんなにうれしい思いをしたことでしょうか。

しかしながら、水におぼれた人を助けようと思って、自分がおぼれて死んでしまう人もいます。まさに、車にひかれるという人を助けて、自分がひかれて命を失う人もいます。忠範は自分の財産をなげだすことによって苦しむ人々を救うことはできましたが、このために自分はかえってそれらの苦しむ人々より一層甚だしい貧乏におちいりました。屋根はおち、軒はくずれ、垣根はやぶれても、それを修理することもできないほどの貧しさを味わねばなりませんでした。

しかし、忠範は人を救うことのできた喜びはつつみきれないほどあっても、決

して自分の貧しくなったことを悔やむような心は少しもありませんでした。ただ苦しむ人々を見ては、見るにしのびず、やむにやまれぬ情にしたがったのであって、自分が貧しくなるなどということは、忠範にとって大事な問題ではありませんでした。止むにやまれぬ心、この心こそ貴いものだと思わねばなりません。

このようにして貧しくなった松村家の後を嗣いだのが、理兵衛忠欣でありました。理兵衛はこの松村家を嗣ぐとともに、この養父のすぐれた精神も受けついだのでありました。理兵衛は幼い時から熱心に学問をおさめました。昔の人の教えを読んでは自分も立派な人間になろうと心がけました。また、学問は死んだものであってはならない。学んだ知識はこれを実地の仕事に使うことも怠りませんでした。

学問にはげみ、仕事につとめて修養をかさね、成長していった理兵衛は、やがて村の人々から立派な人物であると崇敬される人になっておりました。

いま、理兵衛は忠範の後をつぐにあたり、貧窮の底におちている我が家と、

荒廃の頂に達している村とを知り、どのようにもして貧乏になってしまった我が家を回復し、荒廃して生気のない村を復旧して、ふたたび活気のある幸福なものにしようと、固く心に誓うところがありました。そして、これこそ理兵衛が一生をかけての念願でありました。

これよりのちの理兵衛は、前よりももっと努力をして、家業の回復に突進しました。そして少しばかり残っていた遺産の一部を処分して、酒屋をはじめました。この仕事は理兵衛の骨身をおしまぬ努力と、数学にすぐれた知識とをもって、大いに店をひろげていくことができました。

明けるに早く、暮れるにおそい夏の日は、その永い一日をも短いとして、人の姿の見えなくなるまでも働きました。明けるに遅く、暮れるに早い冬の日は、その長い夜ももどかしく、未明まだ星がキラついている頃からはね起きて、それこそ文字通り、夜を日につぎ、寝食さえも忘れて、その仕事にはげみました。苦難に耐え、不撓不屈の数年ののちには、その努力は空しからず、さしも衰微（おと

ろえた）した家運も次第に立ち直り、前にも増した富を築くことができたのでありました。

朝に夕に、松村家のかまどからは豊かな煙が上がるようになりました。理兵衛の第一の念願は達せられました。家業の回復はなりました。しかし、理兵衛はこれで満足したでしょうか。もう何もしないでもよいと思ったのでしょうか。

理兵衛には第二の念願がありました。もっと大きな仕事があったはずであります。言ってみれば、これまでの仕事は高いところへ上るための足場をかけたまでした。戦う前に、まず腹をこしらえたにすぎませんでした。第二の念願とは何をいうのでしょうか。

さて、ここに松村家の家運は、長い冬が過ぎて、よろこびの春がめぐってきたように立ち直りました。がしかし、もう一度振りかえって、天竜川沿岸の一帯の耕地を眺め渡した時、そこにはまだ昔の美田を見つけることができませんでした。岸の柳がやわらかい緑の芽をふき、チラチラと陽炎のもえでる春は来ても、

この砂地原へは稲の植えつけも思うようには始まりませんでした。暖かい春の日の光を吸って、若草がのび、水がぬるんできても、人々はいまだに生計が立たず、寂びしめる心は冷たくむすぼれたまま容易にはとけそうにもありませんでした。もとより村の人々は復旧の事業にひたすら努力をつづけて来ていました。石を取りのぞき、土手を築いたりして、だんだんと取りかえしていくことができました。

このように、人々の努力は年々つづけられていきましたが、そのころは（というのは理兵衛が二〇才の頃から三五、六才前後にかけて）霖雨（ながあめ）、洪水がしばしばあり、そのたびごとに、人々が骨をおって石をはこび、土手を築き、やっと田になったか畑になったかと思って、よろこびの色がまだ消えぬうちに、どっとばかりに洪水がきて、人々のおどろき、悲しみもものかは、たちまちにして流してしまうのでありました。

私は小さいとき、お年寄りから、

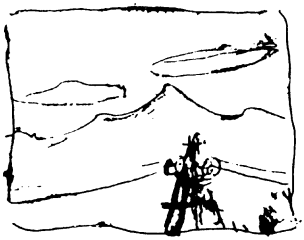
「この世で親に別れて亡くなった子供達が、冥土というところへいく途中、三途の川のほとりの賽の川原で、川原の小石をひろっては、一つ二つと順々に積み重ねて、ようやく高くなると、小さい手をてんでにうって「高くなった」と喜びたわむれている。と、そこへ意地のわるい無情な大鬼が、のそのそとやって来て、がらがらと打ちくずして行ってしまう。子供たちが悲しがって、またはじめから一つ二つと積みなおす。と、また来てくずす。いく度積んでも、そのたびにこわされてしまう。子供たちが泣いていると、情けふかいお地蔵様がその衣の下へ子供たちをかかえて、泣くな、泣くなとなぐさめてやるのだ」。

と、こんな話をきかされましたが、この話のように、人々の努力も積んだ小石のように、洪水がくると流されてしまうのでありました。それはちょうど、暗い夜にともしびの消えてなくなったように、また、ただたのみに思う一筋の糸の切れてしまったように、人々は絶望にも近い悲しみを味わねばなりませんでした。

このようにして家業は立たず、餓えは来ます。病人も出ます。死人も出ます。

はたらく元気もなくなってしまいます。生きる気力さえもありません。野に山に、「春が来たぞ」と、鳥は歌い花は笑って人々の心によびかけますが、ふりむきもせぬ悲しい心。人々はお花見どころではありませんでした。

「秋が来たぞ」と、天はいよいよ高く澄みわたり、野山は紅葉にかがやいて、人々の心を誘いますが、沈んで浮かばぬ淋しい心。いずこの森にお祭りの白い幟や、赤い提灯を見ることができたでしょうか。人々の心には雪をはらんだ灰色の雲が重くつめたく、たれこめているのでありました。



このような有様で、どこにこの世に生れて来た楽しみがあったでありましょう。何のためにこの世に生きている甲斐があったでありましょう。世の中にはこうした苦しみ悲しみしかないものでありましょうか。幸福というものはこないものでありましょうか。

あゝ、人の世に苦しみの嵐は狂い、悲しみの波浪はさかまく。しかも見よ。そこに木の葉のように翻弄され、あらん限りの声で救いを求めて絶叫しているものあるを。しかもまた見よ。荒れ狂う嵐と、逆巻く波浪をついて単身小舟をあやつり救助におもむく勇者のあるを。勇者は誰ぞ。

あゝ人の世に憂いの猛火はうずまき、嘆きの黒煙はあがる。しかも見よ。猛火にあえぎ黒煙にむせび、逃れ出づべき所を求めてもがき苦しむもののあるを。しかもまた見よ。それを救う勇者のあるを。この勇者はだれぞ。

ここに私は松村理兵衛その人こそ、この勇者であるというのにはばかりません。この苦しむ人々を救い、疲れきった村をおこし、すたれた産業を昔にかえそうと

いう念願こそ、理兵衛の第二の念願であり、また一生をかけて誓った初一念であったのでありました。

何としてもこの水害を防ぐためには、どのような洪水が来てもくずすことのできない堤防を築くことがもっとも大切でありました。ほかに方法はないのでありました。

今、お金や米を出して苦しんでいる人々を救ったとしても、それは一時だけのものであって、また何時大洪水におそわれるかもしれませんでした。それに、いっぺん大洪水におそわれると、またもと通りの田や畑にするのは、じつに容易なことではありませんでした。それで後々までこの災いから逃れるためには、どうしても水に流されぬように、つまり、しっかりした堤防を築くことが第一番に大切なことでありました。

理兵衛は、この築堤の工事をおこそうと決心したのでありました。理兵衛は、幕府に堤防をきずくことをお願いしてこれを許されました。理兵衛は大いに喜び

勇んで、村人を励ましてこの工事に当たることになりました。理兵衛の願うところはもとより村人のためであり、村人はまた自分たちにとって生死に関係する大切なことがらでしたから、異議のあるはずはありませんでした。村人は先をあらそって理兵衛のもとに馳せ集まり、協力して築堤の工事にあたることになりました。そしてこの工事に必要な費用はいっさい理兵衛が自分で出すことになりました。人々の胸は、暗い世界から前方に明るい光を感じたように、すでに希望の喜びに打ちふるえているのでありました。

このようにして、石を切る、土を運ぶ、杭を打つ、築堤の工事は勇ましくも始められたのでありました。土を運ぶ人の足は強く大地を踏み鳴らし、槌をふるう人の腕は高く空に鳴りました。腹の底からあがる勇ましいかけ声は、近くの森にこだまを呼び、杭をうちこむ音、石を切る鉄槌の音が晴れわたる空にほがらかに響きました。遊ぶ子供たちは喜び、語りあう女の人の顔はうれしさに満ちておりました。石を切る者、土を運ぶ者、杭を打つ者、誰も彼もが更生の意気に燃えて

おりました。望みあるものは困苦をいといません。夏の日の暑さに汗をぬぐい、秋の霜の冷たさもかえりみません。朝は未明に起き、暮は薄闇になるまで働きました。お茶を飲む時も、ご飯を食べる時さえも惜しんで働きました。

流した汗は、むだではありませんでした。努力はついに成りました。理兵衛の熱心な励まし、村人の一致協力はついに見事な堤防としてでき上がりました。このようにして第一の堤防はでき上がり、人々はいよいよ暗い世界から明るい世界に出ることができ、そしていよいよこれ

から安心して仕事ができるかと思われたのでありました。

しかし、災いはまたもやって来ました。幸福はいつの日にか帰ってくるのでしょう。惜しくもこの時できあがった堤防は、その後に起こった大洪水のため、もろくも欠け崩れ、川水は再び田畑を悪魔のように荒らして去りました。

大堤防も、蟻の一穴から崩れるといいますが、何という見はなされた人々であったでしょう。何という見はなされた時代であったでしょう。村人は再三再四、幾度か仕事を失い、行き暮れて道も知らず、貧窮と餓えとの境をさまよわねばなりませんでした。まことに九仞の功をいっきにかく（長い間の努力もわずかなことで失敗すること）とかいいますが、理兵衛の努力も村人の労苦も消えてはむなしい水の泡と変りませんでした。

理兵衛はこのごろ鬱々として楽しみませんでした。何をしても思うように力が入りませんでした。外に出てみては何をしに出たのかを忘れ、内に入ってみては

何をしたならばよいのか分かりませんでした。理兵衛はご飯さえろくろく喉へ通りませんでした。真夜中にふと目をあいて、見るともなしに天井を見つめていることがありました。人と話すのも億劫のようでした。そして、何事か物思いにふけっているときが多いのでありました。

今日も今日とて、理兵衛は気のすすまぬ昼飯をそこそこにすますと、「ちょっとそこまで」と、いい置いてぶらりと家を出ました。そして家を出た足は自然に天竜の川原のほうへと向いていったのでありました。

理兵衛は、じきこの間の水害の跡まできて足を止めました。そしてそこにたたずんでじっとあたりを眺めました。もろくも打ちくだかれた堤防の付近から頭をめぐらして、一面見るかげもなく砂に埋もれた荒れ跡をながめわたした理兵衛の顔には、いいがたい寂しさと苦痛の色がはっきりと浮かんでいました。白じろと荒れ跡を照らしている真昼の太陽が、理兵衛にはまるで悪魔が「人間の力なんて、そんな位のものだぞ」とでもいって高笑いしているように思われてなりませんで

した。ヒタリヒタリと岸をうっている川波の音までが、理兵衛をからかっているかのように思われました。

せっかく、骨をおってこれまでこしらえたものを。何という無残なことをするのだろう。何者の仕業だ。なぜ、こんなにまでして自分たちを苦しめねばならないのだ。

理兵衛は今も来る道で挨拶をしていった男の顔を思い出してみました。

げっそりと頬が落ちて浮かない顔をしていた。あんな顔を、まだ他でも見たような気がするが。昨日も見たような気がする。何だかみんなあのような顔をしているのではないか。そうだ。みんな心配でいっぱいなのだ。この荒れ跡を見れば分かるではないか。気の毒な人達だ。可哀相な人達だ。

理兵衛はおもわず自分の頬に手をあげて、頬をさすりながら歩を進めて川の岸に立ちました。そしてじっと流れる水に眺め入っておりました。天竜川が洪水のことなど忘れたかのように、そうそうとして岸を打っていました。理兵衛は流れの

音をきいていながら、それが理兵衛にはきこえませんでした。動く水を見ていながらそれが理兵衛には見えませんでした。理兵衛には今、外界のものは何物もなかったのでありました。理兵衛は今、思いの内に深く深く沈み、そして自分の心の底に強く叫ぶもののあるのを聞いていました。

洪水が何だろう。

これで屈してなるものか。だれが負けてなるものか。もう一ぺん造って見せる。

これで屈する。それが男か。

いやしくも男、男といわれるものが、これで屈してしまう。それが志をもった男といえるか。

男子一度生れて志なきは、鋼のないなまくら鉄だ。自分は男子だ。なまくらではない。洪水が何だ。必ず、誓って、やりとげて見せるのだ。あの苦しんでいる顔を救わねばならぬ。そうだ。昔のようにして見せるのだ。

自分の志はこれだったのではないか。自分が一生をかけて誓ったのはこれだったのではないか。

なに。洪水がまたくずす。悪魔が笑うと。なにを、つまらぬ。洪水がなんだ。

悪魔がなんだ。

あゝ、くずさば再び建てん。竜神なにものぞ。笑わば黙して答えん。魔神なにものぞ。なんでこのような私に抵抗することができようか。理兵衛は腹の底から泉のように湧き上ってくる澄みとおった、強い、人間の力を感じたのでありました。

理兵衛は夢からさめたように顔をあげました。顔をあげた理兵衛の眼からキラキラッと涙がこぼれて落ちました。いつか日が西に移っていました。夕日を浴びた陣馬の峰がくっきりと東の空に浮いて見えました。

再び天竜川の川ふちから、勇ましいかけ声が、近くの森にこだまを呼びました。再び槌の音が大空に響きわたりました。理兵衛はふたたび築堤の大工事を起こす

ことになったのでありました。続くかぎりの自分の財産を投じて……。

ふたたび村人を集めて工事にしたがわせることになりました。理兵衛の意気、不屈の意気に感じた人々は、理兵衛と再び生きようとの覚悟をもって、捲土重来（いったん引き下がった者が再び勢いをもりかえすこと）のいきおいで理兵衛のもとに馳せ参じました。志あるものは、失敗のある毎にその志を固くし、その目的に向かってつき進みます。理兵衛はもとよりこれでありました。村人もまた理兵衛に従ってその志を共にするものでありました。相頼り相率いて、再びこのような大工事に着手することになったのでありました。

このとき、理兵衛は養父忠範にかわり、前沢村の名主として人望高く、年いまや四十歳をこえた働き盛りのことでありました。

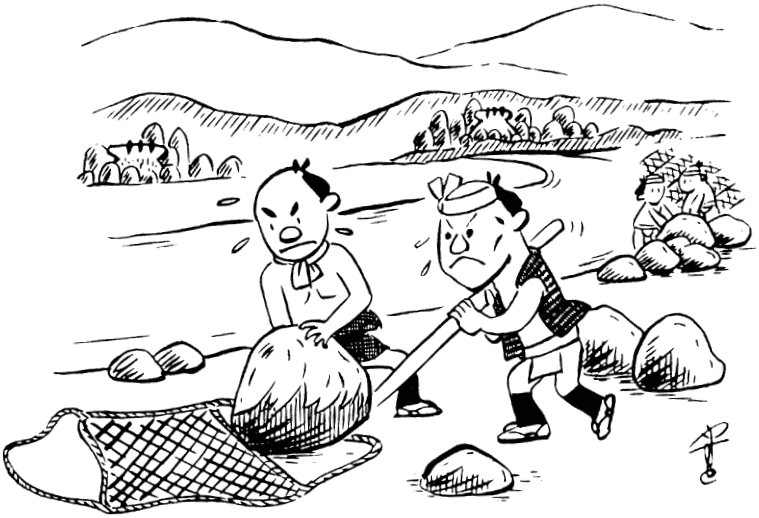
人々の気勢はふたたび上がりました。あのかけ声をお聞きなさい。あの槌音をお聞きなさい。乾坤一擲（運命をかけての勝負をすること）万物すべて皆改まるの思いがするではありませんか。

峰をはなれた朝日が、うらうらと三々五々仕事場へ集まってくる人々の顔をかがやかしく照らしました。

土を運び、石を切り、杭をうつ、汗ばんだ人々の肌に駒ケ根をおろしてくるそよ風が快くあたりました。

はるか南に遠く高い山なみの細かいひだの一つ一つが、夕陽に赤く染まるころ、人々は、明日の仕事を楽しみながら家路につくのでありました。

こうして人々は日々の仕事にいそしみました。しかも、今度の工事は前の工事の失敗のことを教訓にして、ひじょうに



大規模なやり方でした。どうしても、この道に通ずる技術者に来てもらうことが大切なことでした。それで、理兵衛はわざわざ遠い尾張の国（いまの愛知県）から築堤にたくみな石工を招きよせました。そして、石垣を積むには小さい石よりも大石のほうが良いのです。いくら竜神があばれようとも、びくともしない大石にしたことはありません。そのため、理兵衛は数千貫以上もある大石を、遠く数里の地から運ぶことをもいといませんでした。

このようにして、尾張からは築堤に通じた石工がぞくぞくとして招きに応じて乗り込んできました。そして旅支度をといてくつろぐ間もなく、工事場へと向かいました。大きな象のような大石が、機械によって幾日も幾日もかかって、工事場へと運ばれてくるのでありました。

かけ声がそろうと、共に綱がのび、大きな石が少しずつ少しずつ大地をきしませながらジリジリと動いていきました。村の子供達がもの珍しげに、一歩一歩とこれについていきました。川原は大変なにぎやかさでありました。足場を作る

もの、土手を作るもの、筏を組むもの、一人としてじっとしているものはありませんでした。組頭らしい人がその間を甲斐がいしく立ちまわっておりました。理兵衛もこの中に混じって人々を率い、その苦労をねぎらい、あるいは励ますなど、怠りなくつとめておりました。

川原に運ばれた巨石は、太い木を編んだ筏にのせられ、大きな波紋をうって川の底ふかく沈められていきました。巨石が遠くから運ばれ、筏にのせられて河床に沈むまではまったく容易なことではありませんでした。

こうして河床をすっかり、もうそれこそびくともしないほどに固められると、その上に大きな石が積まれて、まるでお城のような石堤が段々とできあがっていくのでありました。

しかし、この大規模な堤防は、決してそうたやすく短い時間にでき上がっていくのではありませんでした。ほんの少しずつ、そしてその間に月日は歩み、田島の里の自然は移って、いくどか四季のおもかげをかえてゆくのでありました。

霞が低くたなびき、桜の花が美しく遠近の野に咲き、鳥のさえずる声もかるい春から、砂は白く水は青く、目にふれるところ緑の色のしたたるばかりに濃い夏景色へ、それより、ざくろの花が黒塀の上に赤く咲いているのが見え、いちじくの実がむっくりとふくらみ、紅葉してきた天神山の上のあたり、とんびが輪をかいて飛ぶ秋へ、また柿の葉もまばらに実ばかりつぶらに、それが黄色い土壁とともに遠くなった斜陽をうけて、一段と美しさをます晩秋へ、それから冬へと自然の色はぬりかえられ、年は移っていくのでありました。その間に、築堤の仕事も段々とはかどっていくのでありました。

しかしながら、堤防の石が一つずつ増して、その完成へと近付いていくにしたがい、また、自然の推移（状態などが移りゆくこと）が折々に変化していくとともに、理兵衛にも淋しい晩年が足音をひそませてやって来つつありました。

理兵衛がこの大石堤の工事を起こしてから、すでに十数年の歳月がすぎていきました。理兵衛も、もう六十歳という年に手がとどくほどになっていました。

理兵衛は子供がありませんでしたので、同じ村の前沢伊兵衛の三男である邦助を養子にもらって、いまではこの邦助、後の理兵衛常邑が家を引きつぎ、名主となり、そして今もなお続けられている築堤工事へは理兵衛に代わって出ているのでありました。

そして理兵衛は、寄る年なみとともに身体が弱り、力も衰え六十歳に近い現在では病の床についている日の方が多くなっているのでありました。思うに、幼少の折から、家業の回復に志し、長じて後は（大人になってからは）一生懸命産業の開発にはげみ、落ちぶれた村の挽回につとめ、まず、治水工事を起こし、事に屈しない精神は再度の失敗にもくじけず、家財をかたむけての大工事をついに起こしてきたのでありました。なおかつ、前沢村の名主としての村の政治や、あるいは親戚塩沢家の危急を救うなど、一日として座のあたたまる折とてはなく努めはげんできたのでありました。このために積もり積もってきた人しれぬ苦労や心配が、寄る年なみに勝てず、ついに病床のうちに起き伏しする今の有様

になったのでありましょうか。

しかし、たとえ病の床に起き伏しする今の身になったといっても、決っして決っして理兵衛が初一念である、苦しむ人々を救ってやりたい、村の人々を安心して家業にはげむことができるようにしてやりたいという考えは、一日もその心を離れる事はありませんでした。そして、ひたすらこの大堤防の完成を心のうちに祈ってやまないのでありました。

天明二年（一七八二）、三年、四年、このころ日本中全国にわたって大飢饉がありました。どうした年の巡り合わせであったでしょう。来る日も来る日も曇った日が続き、穀物は実らず、人々は木の根や草の実をとって食べていかなければなりませんでした。そしてこの辺もやはりその災難を受けなければなりませんでした。人々の苦しみがつのっていきました。

不作であった天明四年（一七八四）の年の瀬が、人々の悲嘆のうちにあわただ

しく暮れていきました。そして、明けて天明五年、一月二月も夢のうちにすぎて、三月もすでに半ばすぎの暖かいある日の午後を、理兵衛はさまざまの思いにふけりながら、西に向かった静かなそして明るい部屋にふせっておりました。

じっと開いた理兵衛の目は、ここ数年来の病のためにくぼんでおりました。福々と肥えていたその頬もげっそりと肉がおちて病のあとがうかがわれるのでありました。しかし、どことなく高雅な徳の高い人品がその眉の間から鼻にかけてしのばれるのでした。そして、また力の人であり、意志の堅固な人であるその面影が、キリッと結んだ口のあたりにただよっていました。

桜も咲こうというこのごろ、珍しく降った昨日の淡雪が日にとけ、軒をつたう雪解け水が午後の陽を真向に受けて明るいこの部屋の障子に、時々チラッチラッと細い糸を引いてうつりました。風もないのか左に寄った庭の孟宗竹があざやかな影を障子に落しておりました。理兵衛の枕元には火鉢にかけた鉄瓶から、かすかな音をたてて、静かに湯気が立ちのぼっていました。

もう桜の花も咲くころだろう。

今年は、それでもいい日和が続いてくれればよいが。

理兵衛は目をつむって、聞くともなしに段々遠くなった軒水の音を聞いていました。

静かな森かげの底の深い古沼の表面に、スッと浮いてきてプッッと消えていくあの水の泡のように、じっとまなこをつぶった理兵衛の脳裏に過ぎ去っていった年々の事どもが浮かんでは消え、浮いては消えていくのでありました。

はげしい水の渦巻。濁流に叫ぶ人々の声。飢えに苦しむ人々の顔。

そんなとき、理兵衛の顔には淋しいかげが浮いていました。それが消えて、

はげしい日のもとに働く人々の姿。勇ましいかけ声。杭をうつ音など……。

それらが理兵衛の脳裏に浮いてきた時、そのおとろえた顔にほのかな笑みがただよいました。

理兵衛の心が、今造りつつある大石堤の事に思いいたると、理兵衛の顔はさっ

と引きしまって見えました。

あの石堤をおいて、ほかに村人を救う道はない。

何としてもあの仕事は成就させなければならぬ。

しかし、自分は、あゝ自分の命は明日をもしれないのだ。自分にはよく分かる。自分の生涯も、ここ数日で尽きるのだということが……。

しかし、あの石堤を見たいものだ ……。

いや、それはとても望まれないことだ ……。

自分はもうあの石堤を見ることはできぬ。自分がこの世を去っても……。

そうだ、自分はこの精神を残さねばならぬのだ。村人を救おう……。自分の後をつぐ者にこの精神を伝えねばならぬ。そして、あの石堤をどんなことがあろうとも、完成させねばならぬ。邦助は多分自分のこの志は承知しているだろうけれども。

そうだ、もう一辺邦助にこのことをよく言いきかせておかねばならぬ。

理兵衛は、ふと、つむった眼にスーと黒いものが尾をひいて飛んだように感じて、パッと目を開きました。

鳥だな……。

と思ったとき、今飛んだかげが庭先の植え込みにでもとまったのか、

ホーホケキョ。

とうぐいすが、二声三声やさしい声で鳴きました。

それから数日後、理兵衛の病はますます重っていって、ついに、天明五年（一七八五）四月の五日、谷の水もとけて野に山に爛漫とした桜の花が、めぐり来たそのよき春を美しく咲きほこるころ、家族、親戚、村人ともどもに悲嘆の涙にかきくれている中を、くれぐれも後事を託した理兵衛は、六十有五年の事の多かった生涯を終えたのでありました。まことにこの人傑（大人物）の死去を悼むように、晴れわたる四月の大空を、悲愁の色を地に投げて、白雲が流れていきました。

今、理兵衛その人を思えば、ある鋼鉄のようなその志。理兵衛の一生はすなわち努力でありました。志のあるところ、道は必ず開かれます。忍耐努力のあるところ、いかなる扉が開かれないことがありましょうか。村、人、ともにこれを愛する深い心情に根ざし、苦しむのを見ては救わねばならぬ、悲しむのを見てはこれを助けねばならぬと、若草のように強く、固い大地を割って萌え出た努力また忍耐でした。どうしてこれが花を咲かせずにおりましょう。どうしてこれが実を結ばずにおりましょうか。理兵衛忠欣が没して、子の理兵衛常邑がこれをつぎ、孫の理兵衛忠良またその後を受け、三代にわたって実に数十年、ついに長さ一〇〇間（一八〇メートル）、工費三万二〇〇〇両の大石堤はここに完成されました。しかもこの工費は幕府からの支給金もありましたが、その多くは松村家の出資によるものでありました。子、孫、ともによく理兵衛の精神を受つぎ、その後、いく度かの洪水にもめげず、屈せず、これを完成したのでありました。

理兵衛忠欣は不幸にもこの堤防の完成を見ることができずして没しましたが、

ついに努力は徒労には終りませんでした。その初一念は貫かれたのでありました。花はついに開きました。しかも、後世ながく芳しい香りをはなつ花でありました。実はついに結びました。しかも一〇〇年たっても朽ちないような固い果実でありました。

以後百有余年、この堤のあることによって、人々は永く洪水の難をまぬがれることができ、年々荒廃に帰した土地は開発されていき、年々黄金の稲穂が波打つようになったのでありました。

村人はふかく理兵衛の徳をしたい、その功績を後世に永く伝えるために、この完成された堤防を理兵衛堤防とよんだのでありました。

さて、私は今、時には高いところに登って、理兵衛が亡くなってから二〇〇年の田島の里をながめ、時には下ってこの理兵衛堤のほとり、天竜河畔に遊び、今をさる二〇〇年前の昔をしのぶのであります。

この理兵衛堤防の跡は、年変り星移って二〇〇年、今はその一部を伝えているにすぎません。中川橋のたもと、驚くばかりの巨石の二三が、いまも天竜の川波にあらわれているのを見れば、その昔、いかに大きな堤防であったかをうかがうことができましょう。その巨石のあるところから少し南に、私が山で見た杉並木が、柳や落葉松を交えて、川沿いにのびております。この柳の芽のほのかにふくらむ早春、木かげにうばら（野ばら）匂い、月見草の咲く夏の宵、さては水清く底の石の数も明らかに小鮎の姿やさしい秋のころ、万葉散りつくして枯れ枝に寒月の結び光の落ちて水に凍る冬にかけて、春夏秋冬、この堤は私にとって、またとないなつかしい場所であります。

しかも、ここに松村理兵衛の霊ありと思えば、岸うつ波にも声があり、やわらかい緑の芝生にも古人の気息あり、と思われるのであります。このように思う私は、なつかしさ、したわしさに堪えないで、こう呼びかけずにはいられません。

「物を破壊する自然の力は大きい。
しかし、これを建設していく人間の力はさらに偉大なものである。」
と。

片桐小学校所蔵『理兵衛堤防』と郷土の見直し

上條宏之

はじめに

長野県上伊那郡中川村片桐田島の地は、前沢川などが天竜川へ注ぎ、河岸段丘に田切り地形をつくりだしている。正保四（一六四七）年三月の「『正保御書上』御事跡稿」（長野県立図書館蔵）では、当時は飯田藩に属していたこの地を「片切村」としており、カタギリの地名がタギリ地形からきていることをうかがわせる。天竜川の洪水・氾濫は、前沢川の氾濫とも結びついて、近世の片桐地域住民の生産・生活の基盤をしばしばおびやかした。したがって、安永元（一七七二）年から文化五（一八〇八）年の三七年間にかけ、松村理兵衛三代が私財を投じて完成した理兵衛堤防は、この地域の住民にとって、忘れることのできない歴史遺産であった。

文化一二（一八一五）年一〇月、安永年間に堤防築造に着手した松村理兵衛忠欣（幼名竹五郎）は、生前の偉業を敬慕され神格化されて、「義公霊神」として祭られた。さらに明治三七（一九〇四）年四月三日、上伊那郡農会は、理兵衛堤防の傍らに「天流功業義公明神」と題し、「農事功労者」として理兵衛を評価した顕彰碑を建てている。

ものがたり『理兵衛堤防』と作者森岡忠一

昭和恐慌とその後の不況のさなか、片桐小学校で「片桐児童文庫」の一冊にガリ版刷りの、『理兵衛堤防』が加えられた。内容は、段丘の高台から稲田が黄金色に輝く田島の里をゆっくり見渡した「片桐村へ来て、已に何年か田島の里の自然の美しさに慣れ親しんだ」人が、「少し注意をしたならば、路傍の一木一石にも」「今私が見てゐ且つ暮している田島の里にも」長い歴史があることに気付き、理兵衛堤防の築かれた歴史をたどり、その功績の大きさと理兵衛の生き方に深く共感する、といった構成になっている。大正一二（一九二三）年の前沢川の大氾濫の被害とも対比しながら、江戸時代の村の生活と洪水の被害の大きさを子

どもたちに理解させ、その自然の猛威に挑んだ三代にわたる松村理兵衛の努力の跡をたどっている。世の中の苦しみ悲しみを見たとき、それを救うために困難な条件にもかかわらず進むものこそ勇者であるとし、つぎのように理兵衛を評価している。

「ここに私は松村理兵衛その人こそ、この勇者であると言ふのにはばかりません。この苦しむ人々を救ひ、疲れきつた村をおこし、すたれた産業を昔にかへさんとの念願こそ、理兵衛が第二の念願であり、又一生をかけて誓つた初一念であつたのでありました。」

この物語は、挫折しそうになりながら、遂に堤防を完成した三代の理兵衛の事跡をたどり、二〇〇年後まで残された理兵衛堤防の一端から築造完成当時をしのび、つぎのように結んでいる。

「此所に松村理兵衛の霊ありと思へば、岸うつ波にも声あり、やはらかき緑の芝生にも古人の気息あり、と思はれるのであります。かく私はなつかしさ、したはしさに堪えないで、こう呼びかけずには居られません。

『物を破壊する自然の力は大きい。

然し之を建設していく人間の力は更に偉大なるものである。』

と。」

一種の人間讃歌であり、生産的創造的な生き方への共鳴がある。すでにその事跡は痕跡にとどまっていようとも、民衆の生活を守るための努力は尊い行為であることを、子どもたちに語りかけている。満州事変があり、戦争への動きが現われていたときでもあったことを考えると、この物語に戦争肯定の気配のないことは、注目しておいてよいであろう。

ガリ版刷りのこの本には、この物語の作者と、この物語の創作年月日がともに記録されていない。しかし、当時片桐尋常高等小学校の教員であった森岡忠一が、昭和六（一九三一）年から昭和八（一九三三）年頃に書きあげた作品であることは、忠一夫人春美さんによって確認されている。

森岡忠一は、明治四一（一九〇八）年七月二八日に生れた。本籍は、上伊那郡赤穂村大字赤穂一五〇七七番地であった。赤穂尋常高等小学校を卒業して長野県立伊那中学校に学び、大正一五（一九二六）年三月二日に卒業した。昭和二（一九二七）年三月三一日に片桐尋常高等小学校の代用教員に就職し、昭和一二（一九三七）年三月三一日付けで、上伊那郡中沢尋常高等小学校訓導に転出するまでの、森岡

満一八歳から二八歳までの一一年間は片桐小学校に勤務した。

代用教員として就職した森岡は、教員資格を取るために努力し、昭和二（一九二七）年一〇月には尋常科正教員、昭和四（一九二九）年一月には高等科を含めた本科正教員の資格を長野県から取り、昭和二年一一月から訓導となっている。昭和一一（一九三六）年三月三一日には片桐青年学校指導員を嘱託された。

昭和二〇（一九四五）年八月の十五年戦争敗戦の日を中沢国民学校で迎えた森岡は、戦後も上伊那郡下で教員を続け、昭和三九（一九六四）年三月、箕輪中部小学校を最後に退職した。退職後の昭和四八（一九七三）年三月からは、郷里の駒ケ根市で市誌の執筆に当たる専門委員の一人となった。昭和五四（一九七九）年九月一日発行の『駒ケ根市誌　現代編上巻』には、森岡の執筆した「養蚕」（第四章第三節）が四〇ページ余り収められている。森岡の郷土の歴史への関心が、継続していたことをうかがわせる。

昭和初年の郷土への関心の高まり

ものがたり『理兵衛堤防』の創作された昭和初年は、小学校教育のなかで、郷土教育への関心が高まった時期であった。

昭和初年、信濃教育会や郡市部会は、国史教育の原拠である史料の研究をすすめ、それぞれ教師の参考書をまとめた。郷土学習とも関連して郷土史研究も盛んとなった。昭和四（一九二九）年から翌年にかけて、信濃郷土文化普及会は、信濃郷土叢書を企画し、春日賢一『木曽義仲』、藤沢直枝『真田幸村』、大平喜間太『佐久間象山』、市村咸人『松尾多勢子』などを児童の読物として刊行した。また、信濃教育会は、民俗学者柳田国男の指導監修で、昭和三（一九二八）年に『郷土読本』を発行した。「山の人生の記録であり、農村の文化史であり、漁村海島の生活変遷史」を狙ったものであった。信濃教育会の雑誌『信濃教育』には、昭和初年に県内外の歴史・地理研究者の論文が載せられ、柳田国男自身も、昭和二（一九二七）年から昭和八（一九三三）年にかけて、「小さき者の声」「方言研究の意義」「地名の話」「食物と心臓」「民俗採集と言葉」などを寄稿した。

昭和六（一九三一）年六月には、信濃教育会が郷土調査項目の研究を始めた。郷土調査要目調査会の研究分野は、「地質・鉱物・地形」「動物」「植物」「民俗」「気候」「地理」、それに「歴史」からなっていた。歴史は、市村

咸人と一志茂樹が担当した。調査の結果は、昭和八（一九三三）年七月に信濃毎日新聞社から『調査要目』として出版された。市村の考えは、『信濃教育』（一九三三年三月）に発表されているが、地方史・郷土史の本領は、「地方に即したる郷土人の政治的・社会的・経済的生活そのものの発展過程の考察」であるとし、「郷土調査は郷土人によつてのみ行はるべき貴重な仕事であるといふ自覚を以て進みたい」と決意を述べている。

上伊那教育会は、大正一〇（一九二一）年に唐沢貞治郎編の『上伊那郡史』を発行していた。昭和三（一九二八）年には、先輩教育者を参集し、教育思想史の材料を集めるために、幕末から明治中期までの教育上の変遷について懇談会を開いた。翌年には高遠藩の坂本天山などの教育思想の歴史にかんする資料を集めた。また昭和七（一九三二）年には、上伊那教育会の総会で、京都帝国大学教授西田直二郎の「日本文化史」の講演があり、第三部会で、下伊那郡出身の市村咸人の「武士の興起より戦国末期に至る南信濃」の発表があった。この年には上伊那史談会が作られ、宮田尋常小学校では教員が郷土研究を始めている。

このように見ると、森岡忠一の理兵衛堤防への着目は、時代的な動きと深くかかわっていたことがわかる。昭和恐慌による地域の経済的な行き詰まりや停滞が、理兵衛のような人材を求めているといった思いが、森岡にあったことも考えられる。

ものがたり『理兵衛堤防』は、天竜川と深くかかわった片桐村の村おこしを子どもたちに呼びかけた作品、といってもよいであろう。

〈この稿を書くにあたって、早川貞英氏（箕輪中部小学校）・中村裕次氏（中川西小学校）のお二人に資料の提供をいただいた。記して感謝したい。〉

座談会　『ものがたり理兵衛堤防』の書かれた頃

森岡先生の教え子たち
中川村田島　西村祐二
上山茂英
中平智博
聞いている人　北原優美

――片桐というところを他所の人に説明しようとしたらどんなところですか。

西村　村の産業は農業が主ですが、河岸段丘が発達して標高の高いところと低いところの差が大きいので、果樹や水田・養蚕とバラエティに富んでいて、土地は肥えているし生活は豊かです。これが良いのか悪いのか、満ち足りているので冒険心に欠けるところがある。あんまり外へ出て行って大きい事をやろうという人は少ない。

――皆さんは、『ものがたり理兵衛堤防』をお書きになった森岡忠一先生の教え子だったそうですが、その頃のお話を聞かせて下さい。

西村　その頃は片桐尋常高等小学校といった時代だね。中川村ではなく旧片桐村です。森岡先生はもう亡くなられたようだがね、その頃はまだ独身の時代だったようです。角張った顔で眉が濃くて、ロイド眼鏡のような縁の太い眼鏡をかけて、背は余り高くないが、がっちりした体格をしていた。音楽と体操の得意な先生だったね。

その頃の先生というのは、どの先生も音楽ができるということはなくて、オルガンの弾ける先生は少なかったからね。古びたオルガンがあって、いい声で歌ってくれた。

当時の先生としては穏やかな方で、殴られたなんていう人もあったかもしれないが、精々おしゃべりしているところへチョークが飛んでくるくらいだった。

その頃は私たちは小学校の四、五年生で、昭和一一、二年頃です。ときたま支那事変が始まる前後だったこともあって、国の情勢や経済情勢、殊に教育関係では予算の面でも厳しかったのか、私たちは一学年全部合わせても六四〜六六人しかいなかったから、一組にまつめて（まとめて）教育を受けた。普通教室より少し広い特別教室があって、そこへ何しろぎゅうぎゅうに詰めて厚飼いの教育だった。学校側としてもそんな状態だったから、素質のある人を担任に当てたと思うが、落ちこぼれも出たね。先生もそれなりに大変だったと思うよ。

上山　おれが落ちこぼれた。（笑い）

西村　おめさんばっかじゃないら。（笑い）

中平　ここへ来る前に昔の写真があったから見てきたが、森岡先生も若かったな。

――奥さんも昨年なくなられましたが、奥さんのお話では、未だ結婚なさる前だったそうです。

西村　新卒で赴任してきたらしい。今七〇才くらいの人達も教わっているそうだから、ちょっと一〇年くらいいたんじゃないかと思う。

――森岡先生がお書きになった『理兵衛堤防』をごらんになったことがありますか。学校の副読本に使われたかと思って、そのあたりの事情をお聞きしたかったのですが。

上村　全然知らなんだなあ。

西村　子供の頃にはこういうことに対して余りピンと来なかったね。だけど、この『理兵衛堤防』の話は、いくらか聞いたような覚えがある。今になって考えると、森岡先生そのものも、地域の歴史的なものに非常に興味を持って調べたりして、こういう資料を作っていたらしい。私が歴史に興味を持つようになったのは六年生の頃からだが、その前に森岡先生からの影響がいくらかあったのかなと今になって思う。

上山　そういえば、子供の頃天竜へ泳ぎに行って、そんな話を先生から確かに聞いたことあるな。

西村　あれは学校で泳ぎに連れて行ったのかなあ。

――その頃は天竜川の水量が多くて、泳ぐにはかなり自信がないと怖かったでしょうね。

中平　大体ほかに遊ぶところがないから天竜で泳いだが、大きい生徒がいて深いほうへ行っちゃあいけないなんていって見ていてくれるし、それで溺れたなんてこと聞かなかっ

たなあ。

――その頃は瀬が緩かったんですか。

上村　それでも大水の後なんか瀬が強かったが、波に乗って下るのが面白くてね。今じゃとてもそんなことできないよ。

中平　その頃じゃないかな、理兵衛堤防と小池堤防とあって、小池堤防は天竜川が真直にぶつかるところで、理兵衛堤防は中川橋の下流のところに見えているのがそうなんだけど、小池堤防なんて無いなんて言った先生もあったなあ。

西村　その頃は、一の刎・二の刎・三の刎といって、水が葛島の方へ行くように、水を追う角度に作ってあったんだが、現在の天竜川の西側に一部葛島地籍の耕地があったというくらい、こちら側のほうが威勢が良かったから、川を向う側へ向けて追ったという経過があるようです。それには前沢川の水勢も利用して、一の刎・二の刎・三の刎と刎を入れていったわけです。現在の堤防のように連続していないで、切れているんです。

――霞堤というのですか。

西村　霞堤とは違う。その頃は今のように連続して堤防を作るというのでなく、途中が切れている。国家予算でやるのではなくて、地主たちがやるのだから、刎で耕地を守るというやり方だ。先端のほうは石積みを巻いて、耕地のほうからの余水も吐けるという、余り高くない堤防だから、ちょっと水が出るとオーバーして入ってくるというものです。この刎は、昭和二四年頃から二八年にかけて天竜川の改修をしたときに壊してしまったが、川の中に今でも残骸が残っているところがあると思う。

――三六災の時は今の連続堤防ですか。

西村　そう、三六災のときはもう出来ていた。

――その連続堤防は決壊はしなかったのですか。

西村　水がオーバーしたが決壊はしなかった。まあ、昔は永続性のある河川改修ではなくて、有力者の意見が反映されて、銘々が自分で勝手に独立でやるので、一貫してみるとどうも不自然なところがあるというのが実情だったと思う。それで建設省がやるようになっても、確たる資料がなくて、民地と河川の境界がはっきりしなくて、石を放って届いたあそこまでが俺んとこと川との境界だという笑い話があったくらい、境界の確認のできないところがざらにあったね。

上島　葛島との境の外記島（げきじま）のところに、今はどうなったか、川の中に「六人持ち」とか「七人持ち」

とかいう名前の土地がある。昔は耕地になっていても洪水で流されれば復興できなくて、土地台帳の中だけに残っている土地がこの辺には大分ある。

西村　実際問題として川の中の土地を持っていてもどうしようもないし、建設省のものになっている土地が大分あると思う。

――松村理兵衛家の文書を見せていただいたことがありますが、川の境界争いで、江戸まで持ち込んで訴訟をしたときの絵図に、向こうの山とこちらの松ノ木を見通してその線上に境界線を持って来るというのがありましたが。

西村　理兵衛堤防から向こうの夜泣き石を見通した線を朱引きといって、その範囲から天竜寄りのものが全部堤防の費用を出し合っていたが、堤防が改修されてからはそれはなくなった。

――取り立てて郷土学習というのを受けられた覚えはありませんか。

西村　その頃は社会勉強というよりは農業に力を入れていたんじゃないかと思う。畑なんかも学年ごとに作っていたし、陸稲だとか、さつまいも、ねぎなんか作った覚えがある。授業の一部になっていた。

中平　片桐の学校には笹岡という校長先生がいて、そういう農業教育に対して熱心だった。

西村　そんな傾向があって、各学年各クラスが参加して農業をやったということがあったんだと思う。

学校の農場で陸稲を作って、豚を飼って、収穫祭には豚汁を作ってもらって食べた。当時は国の政策に迎合するような教育をすることが至上命令だったと思うし、そうすることが先生の勤めという観念だったと思う。小学校の四、五年では思想的にどうのという関心はないから、あんまりどのような教育だったか記憶にない。読み書き算盤ができれば良いという親の考えだったから、自分から進んで勉強しようという意欲はなかった。六年から中等学校へ行く子供も限られていたし。

中平　家では百姓をやっておって、お手伝いをすればいいくらいにしか考えていないから、農作業の忙しいときには「学校からお暇を貰って来い」なんて言われてね。勉強なんか好きじゃないからむしろ喜んで帰ってきたもんだ。

西村　あまり小さい頃のことは分からないが、物心付いてからでも農家の生活は楽なものではなかった。厳しい傾向があったし、学校へ行くようになっても良いものは着ていけなかった。

稲がものすごいイモチ病にかかって凶作になったのは、

たしか昭和一二、三年頃だったと思うが、その頃は小作地が多くて、年貢は現物で納めることになっていたから、年貢を納めるのがエンヤラヤットで、年貢を持っていってしまったら家で食べるものがないような状態だった。それを子供心に聞いておって、作文に書いて褒められたことがある。あの頃は裕福な暮しをしている人はあまりなかった。

上村　その当時、太田房江という先生がいて、女の子にはモックラというものをはかせた。今で言うモンペとか雪ばかまというものと同じものだ。それを全校の女の衆にはかせたが、それが子供がモンペをはいて学校に行く発祥だったね。それ以前は女の子は大抵着流しだった。

――洋服を着て学校に行く子は少なかったんですか。

中平　おれたちの子供の頃には、男の子は股引と上着は野ジュバンというのが普通の子供の服装だったね。洋服とかズボンなんて子はよくよく特種の人だった。

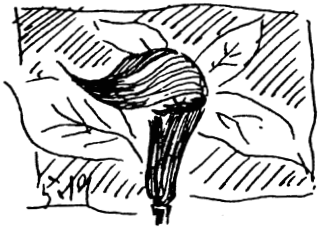
――股引は紺のぴったりした木綿ですか。モンペとはまたちょっと仕立て方が違うんですね。

西村　男の子の場合は違う。またたびの役者が着ているようなやつ。これを股引といい、女の子がはいたのはモックラといって一寸違う。

上村　モックラが出てくる前は、女の子は着流しに前だれがけというのがごく普通だった。家織りの木綿のごっついのを着ていた。

――八〇才くらいの先生方に伺うと、昭和の初め頃は農村不況の真っ最中で、「今月は先生方の給料をちょっと待ってくれ」とかいう年が何年か続いたということですが。

西村　片桐村は教育予算についてはよくやっていた方だと思うが、それにしてもそうした時代の背景があってか、もう一人先生を増やそうということはなくて、厚飼いで分数の基礎ができていないから、いまだに算盤勘定が不得手なのはあの頃の影響かと思っている。



編集後記

森岡先生が『理兵衛堤防』を書かれたのは、「おそらく昭和八年頃のことだと思う、まだ独身だった。」と、奥さんの言でしたが、その奥さんも亡くなられて、残された子供さん達には詳しいことは分らないということでした。

現在中川村の教育委員会には、「片桐校児童文庫之印」という印を押されたガリ版刷りのものが残されており、このガリ版も先生の字のようだとのことです。

退職後、『駒ケ根市誌』の編纂委員を五年ほど勤められましたが、奥さんが病弱であったので職を辞し、油絵・俳画・俳句を楽しみながら晴耕雨読の日々を送られたとのことです。子供の時から画家になりたいと思い続けてこられたという絵は、たくさんの画帳となって残されており、その内から教え子たちの座談会の記録の中にカットとして入れました。

信州大学で近代史を教えていらっしゃる上條先生にお願いして、森岡先生の経歴や、「信州教育」が名を高めた昭和初年の時代背景を書いていただきました。

なお、「語りつぐ天竜川」シリーズの中に下平元護氏の『理兵衛堤防』がありますので、併せて、読んでいただけたらと思います。

（北原）

松澤　　武（まつざわ　たけし）

大正13年下伊那郡喬木村伊久間に生れる。
旧制東京高等農林学校獣医科卒業。
昭和27年より県内高校の教師を歴任し、昭和59年退職。

著書
『伊久間地先に於ける天竜川の変遷』他。
共著
『天竜川流域の暮しと文化』へ「上流域の水害と治水」
（磐田市史編纂委員会編）

天竜川流域の村々

平成２年３月15日　発　行

企　画 発　行	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	長野県駒ヶ根市上穂南７―10 〒399-41　☎0265-82-3251
著　者	松　澤　　武	長野県南安曇郡豊科町本村 〒399-82　☎0263-73-2081
編　集	㈲北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町高家5279 〒399-82　☎0263-72-6061
印　刷	双葉印刷㈲	長野県松本市城東２―２―６ 〒390　☎0263-32-2263

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

天竜川は独特の形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしていますが、後背に多雨域をもつ三峰川・小渋川・太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量の土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方、この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水ごとに濫流する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。反面、天竜川は母なる川として地域の人々の生活を支え潤してきました。田畑を灌漑し、漁獲をもたらし、山深い信州と他国を結ぶ物資の交流の場でもありました。情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んできました。伊那谷の風土は天竜川と無関係ではあり得ません。今後とも、天竜川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水したり、汚したりすることは避けねばなりません。

この天竜川を鎮め、水を高度に利用するための地元の長い営みの後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、その間地域の皆様からの多大なご協力のもとに、天竜川の安全性は格段に向上しました。しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめ、河川施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。また、水害防止と利水に一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え、その方向に向けて管理してゆくことがこれからの課題であると考えます。

「語りつぐ天竜川」は、天竜川の治水に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立ちたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
所長　北川　明

「語りつぐ天竜川」目録

1. 伊那谷の気象　米山啓一著
2. 天竜川上流域の立地と災害　北沢秋司著
3. 天竜川に於ける河川計画の歩み　鈴木徳行著
4. 総合治水の思想　上條宏之著
5. 総合治水と森林と　中野秀章著
6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷　松澤　武著
7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷　今村真直著
8. 村境は不思議だ　平沢清人著
9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷　倉沢秀夫著
10. 諏訪湖の御神渡り　米山啓一著
11. 理兵衛堤防　下平元護著
12. 近世　天竜川の治水 －伊那郡松島村－　市川脩三著
13. 川筋の変遷 －天竜川と三峰川の場合－　唐沢和雄著
14. 伊那谷山岳部の降雨特性　宮崎敏孝著
15. 天竜川の橋　日下部新一著
16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井　北原優美編
17. 天竜川の魚と虫たち　橋爪寿門著
18. 天竜川のホタル　勝野重美著

（以上既刊）

19. 天竜川流域の村々　松澤　武著
20. 小渋川水系に生きる －人と水と土と木と－　中村寿人著
21. ものがたり　理兵衛堤防　森岡忠一著
22. 量地指南に見る　江戸時代中期の測量術　吉澤孝和著
23. 土木技術と生物工学 －生きものを扱う技術－　亀山　章著

（発刊中）